

知覚過敏症について



私は象牙質知覚過敏症について、自らの知覚過敏の経験からどのように引き起こされたのか調べました。どのような予防をすれば良いのか調べました。象牙質知覚過敏症とは、擦過刺激、冷温熱刺激などにより引き起こされる一過性の痛みを指し、特にう蝕や歯髄などに病変がない場合に見られます。エナメル質は削つても痛みを感じる事はありませんが、エナメル質内部の象牙質を削ると痛みが生じます。

象牙質には最表層部から歯髄まで連続する無数の象牙細管という管状構造物が存在し、内部は象牙細管内液で満たされて、歯髄内神経の末端繊維が分布しています。健全な象牙質を歯ブラシや探針などで擦過すると、圧力が象牙細管内に伝わり細管内の液成分の動きが内部の神経の末端部分を刺激して痛みが生じると考えられています。

知覚過敏発症の原因としては、酸性が強めの飲食物の多量摂取による酸触、乱暴なブラッシングによる摩擦、他にも歯ぎしり、噛み締め癖による咬耗、歯周病や加齢による歯頸部の露出などが考えられています。また日常生活

の中でも歯は徐々に擦り減り、第一臼歯の咬合面は一年に約0.3mm、小臼歯は0.1mm減っているという報告もあります。六十年間で約1.8mmものエナメル質が失われるため、象牙質が露出してしまいうこともあるそうです。これらの症状は免疫力が低下している時、ストレスを抱えている時や妊娠中などに急に発症することもあります。

知覚過敏症を予防・改善するには

●酸触による知覚過敏の場合

酸性が強い飲食物の多量摂取はエナメル質表面を溶解させてしまうため、お酢や柑橘系の食べ物を食べ過ぎない事、炭酸飲料をチビチビ長い時間にわたって飲まない事、摂取後は飲料水で口腔内を洗浄するといった予防が大事になります。

●摩擦による知覚過敏の場合

オーバークラッシングに気を付けて、柔らかさやサイズの合った歯ブラシ、歯間ブラシを使用しましょう。

●咬耗による知覚過敏の場合

歯ぎしり、噛み締めによる咬耗には保険で作れるナイトガードを使用して予防することをお勧めします。

歯科助手 清藤

手話について



私は今回、手話について調べました。欧米と比べ日本における手話の歴史が浅く、言語として認められるようになったのが最近だと知り、昔からあるものだと思っていたので驚きました。

ろう者の子供たちの間で使われていたジェスチャーから手話が発展したことを知り、自然に生まれたものに着目した人がいたことによりろう教育に手話が入れられ、ろう教育が始まったと考えました。一七六〇年にフランスで世界初のろう学校が設立され、日本においては一八七八年に京都で初めてのろう学校が設立されました。この頃、日本手話の原型とすべきものが生まれ徐々に言語機能を持つものに変化していきました。

しかし、一九三三年の全国ろうあ学校長会議で当時の文相大臣の発言により、手話法から純粋口語法教育に切り換えられ、以来一三〇年間も手話がろう教育から排除されて

いたことには驚きました。反対意見があると、一つのことを認めてもらうまでに長い時間がかかる事が考えられます。

聴覚障害者と一つにまとめて考えていたが、どの時期から聞こえなくなったのか、もどから聞こえないのか、聞こえないレベルはどのくらいなのかによって、コミュニケーション方法を考えることが必要だと考えられます。様々なコミュニケーション方法がある中で手話はろう者に寄り添った方法だと私は思いました。

手話とひとまとめにしても種類があることを知り、日本手話と日本語対応手話を比べると、日本手話は異なる文法で相手に伝えるので、ろう者同士で会話するには便利だと思いが、健聴者がいちから習得するとなると日本語対応手話の方が覚えやすいのではないかと考えました。また手話には限られた言語数しかないのですべてを相手に伝えるのは難しいのではないかと考えられます。手話だけではなく、口語も用いて伝えられると会話がスムーズにできると私は思いました。

調べたことで、手話の歴史は比較的浅く今広がり始めていると感じました。

手話を言語として認め、手話が日常的に使え、ろう者とうる者とうる者以外の者が共生できる社会を目指す手話言語条例を二〇一三年に鳥取県が全国で初めて制定しました。現在日本における手話言語条例成立自治体の数は少しずつ増えてきています。その中で東京は

江戸川区・荒川区・豊島区・足立区・墨田区で可決されています。板橋区は二〇一九年六月に板橋区手話言語条例が制定されました。日本全体で手話言語条例が制定されれば、手話に対して興味を持つ人が増え、ろう者と積極的にコミュニケーションができるようになると考えられます。

ろう者にとっても健聴者にとっても手話がコミュニケーションツールとして多くの人が使えるようになるのいいなと私は思いました。

歯科衛生士 黒原

